談話室（海外研究体験記）

日本移住日誌

オローク ブライアン*

産業技術総合研究所
〒305-8568 つくば市梅園 1 丁目 1-1
(2019 年 12 月 12 日受理)

How I Came to Live and Work in Japan

Brian O'ROURKE*

AIST, Tsukuba, Umezono 1-1-1 305-8568

(Received December 12, 2019)

少し前、有名な日本庭園を訪れた時、入口で入場料を払おうとすると、アテンダントに突然英語で「where are you from?」と尋ねられた。私は一瞬躊躇して、「アイルランド」と答えた。正確には「東京」と答えるべきだったのだが、アテンダントは明らかに私が外国人観光客だと思っていたので、結局「アイルランド」と答えたのだ。このように自分の出身を尋ねられると、改めて日本に移住したという事実を思い出す。実際、私が生まれ育ったのはイギリス領となっている北アイルランドの南海岸沿いのウォーレンポイントと呼ばれる小さな町からさらに数キロ離れた田舎である。牛や羊でいっぱいの緑の畑に囲まれた、家から細い湾の向こう側にあるアイルランド共和国の素晴らしい景色が見えるところである。ご縁があって、北アイルランドを離れてはるかかなたの日本で暮らすことになった。

1996 年、18 歳の私は、クイーンズ大学ベルファスト (QUB) に進学し、物理学を専攻した。学部生の時、留学生としてノルウェーで夏を 2 年連続で過ごしたのが最初の海外滞在経験となった。1 年目は IAESTE¹⁾ という国際交流組織の制度で、2 回目は前の夏に始めた仕事を続けるために招待されたのである。大学院生になる前に再び IAESTE でオーストラリアに数か月留学した。これらの経験を通して、世界の広さと面白さを実感し、外国で仕事を心得、生活できる可能性があることを知ることができた。

私が最終年度の学部生であったとき、QUB に新たに着任したフレッド・カレル助教授による原子物理の授業

Fig. 1. (color online). 北アイルランドの実家からの景色。写真が南向き、背面はアイルランド共和国の山。

を受けた。カレル先生は、日本での長期滞在から戻ってきたところであった。東京都調布市の電気通信大学 (UEC) で、電子ビーム・イオン・トラップ (Electron beam Ion Trap, EBIT) 実験装置の設計と構築をして、多価イオンの研究を行ってきたとのことであった。カレル先生は博士課程の学生を探していて、その学生は日本に行って UEC で実験をする機会があることを教えてくれた。私は研究内容とともに日本滞りの可能性があることから、先生の研究に興味を持ち、2000 年 9 月から博士課程に進学した。

カレル先生の言葉の通り、その数か月後の 2001 年 1 月に、私は初めて日本を訪れ、EBIT 実験の研究を行った。その後の 3 年間で、合計 4~5 回来日し、継続して研究を行った。しかしながら、毎回の滞在期間は数週間程度で短く、実験の合間に、観光や日本の文化を体験することはほとんどできなかった。数回の来日で日本に興味を持った私は、もっと長く日本に滞在したいと思うようになっていた。

大和スコラ²⁾での 20 ヶ月は、おそらく人生で最も楽しい期間だったと思う。日本語学校ではもちろんいろいろ大変なこともあったが、語学力が向上し、達成感、充実感を味わうことができた。またプログラムの最後の数ヶ月間は、日本での仕事を体験するワークプレイスメントが設定された。私は理化学研究所の山崎先生に連絡して、埼玉県和光市にある原子物理学研究室で研究することになった。研究は自身の博士課程のテーマに似ていて、多価イオンへの表面衝突の入射過程を調べる研究であった。大和スコラの終了後も研究を継続するために、日本学術振興会 (JSPS) の外国人特別研究員に応募し、採択された。JSPS フェローシップのおかげで、2007 年末まで理研で研究を続けることができ、その間、日本人の婚約者と結婚し、最初の子供が生まれた。

* E-mail : brian-orourke@aist.go.jp

Fig. 2. (color online). 広島県宮古島にて (2001 年)

Fig. 3. (color online). 全都道府県を自転車でツーリングするのが長年にわたって計画した。2019 年 3 月、鹿児島県で完成したときの様子。

このように日本に生活の基盤を得ることができたが、次の仕事（ポスドクとして働くことのできる研究機関）を見つけるのは困難であった。結局、ドイツのダルムシュタット市の近くにある GSI 研究所³⁾でポスドクとして研究することになった。GSI はイオン加速器の施設があり、重イオンに関する研究で有名である。さらに、加速器で発生される重イオンは多価イオンでもあって、EBIT 装置と同じような衝突実験ができ、原子物理グループもある。GSI にいたとき、現在建設中の次世代施設 FAIR の計画などにも関与していた。GSI での 2 年間はとても面白かったが、家族との別居がつらくて、日本に戻れるように仕事を探し始めた。そのころ、産業技術総合研究所（産総研）の公募を見つけて、応募した。研究内容は陽電子消滅と電子加速器であり、どちらも私の専門ではなく、経験が足りないと思われるのではないかと心配したが、面接に合格することができ、研究員としての採用が決まった。こうして、2010 年に日本に戻ることができ、つくば市の産総研で研究を始めた。

産総研に就職してからほぼ 10 年が経った。我々の研究グループは電子加速器を用いて、高強度低速陽電子ビ

ームを発生して、陽電子消滅分光（特に陽電子寿命測定）の測定法開発とこれを用いた材料評価を進めている。ここ数年、加速器ベースの中性子源を構築し、中性子による材料評価もできるようになっている。研究に関するメールのやり取りや国内ワークショップ・会議での発表等、多くの仕事は日本語でしている。しかし、日本で研究を行っている外国人研究者は、まだ少ないと言わざるを得ない。ヨーロッパやアメリカの大学・研究所では多くの外国人がいて、他国の文化や考え方が混ざりあり、相乗効果となって研究が進展しているように思う。その点で日本は遅れていると思う。私のようなケースが珍しくなることを願っている。日本人の若者が日本国内での就職だけに固執するのではなく、若いうちに海外の他国を経験し、異文化への理解や興味を深めてくれることを願っている。

文 献

- 1) <https://iaeste.org/>
- 2) <http://dajf.org.uk/>
- 3) <https://www.gsi.de/en/>